

発刊に当って

鈴木慶治

明けましておめでとうございます。皆様にとって今年もよい年でありますよう心からお祈り申し上げます。

さて、東北林木育種場ではこのたび「東北の林木育種」と言うやさやかな印刷物を皆様にお届けすることにいたしました。そして今後も毎月続けたい考えでありますから御愛読の上よろしく御活用の程お願いいたします

林木育種事業がわが国林業の将来にとっていかに重要なことであるかは皆さんはすでに御承知のことと思えますし、今後改めてふれることも考えられますので、ここでは省きますが、この重要な林木育種事業が国や都道府県の予算をもって組織的に実行されるようになってからは10年になります。そして一般的には「今や我国の林木育種もようやく第二段階に踏み込んだ……」と指摘する向きもありますが、育種はそれ程むづかしい未開発技術と地域的諸問題を抱えているだけに、全国的には必ずしも、言われる程立派な成果を収めているとは言えない点もあるようです。すなわちある地方では所期の成績をあげている例が見られる反面、他の所ではまだまだ前進の跡は比較的小さいと言うように、その実態はまちまちと云えるのでないでしょうか。このように沢山の難題を抱えている育種関係者は毎年地域的に育種協議会を開催し技術問題や行政関係事項等について熱心な討議を重ね、全体の成績向上と育種事業の推進を計っておりますが、この会議の中で近年「育種場は研究発表や情報の交換を内容とした地域的機関紙の発行」を繰返し提案されております。そこで私達はこれについて深く考えました結果、「地域的機関紙なら地域の実態あるいは特性に応じかつ当面必要度の高い内容であることが好ましい」との結論に達しました。

一方これとは別に私達は時々管内各地の採種園や採種圃等を見て歩きます。もっとも少ない人員でしかも時間的制約があるため、全体からすればごく一部の視察にすぎないうらみはありますが、その結果では専門的技術者が配置されている所ではそれなりに見るべき成績をあげ

ておりますが、そうでない一般の所では前者に比してやや劣り、しかもその様な箇所が少なくないことを憂いております。そしてこの様な成績に止っている原因には予算の問題や管理体制あるいは現場担当者の育種技術の度合等にあると察せられました。しかしこれらの原因のうち一部は上部の配慮によってある程度解決される見通しを得られますが、現場担当者の技術問題については育種場の立場からも責任の一端を感じております。もし仮りに貴重な育種母材料をもって折角立派な採種、採種園等を作りながらこれを管理する技術不在の状態とあっては冷汗ものと言わざるを得ません。また従来すぐれた苗畑技術者となえられてきた方々は必ずしも育種の精通者であると言い難い事例にも会っております。この様な実態から一部の専門家によって益々深められてゆく新技術の開発等は、もちろん緊急な要件であると思いますが、すでに歩きつつある林木育種、特に私達を取りまく現状からすれば育種に関する現場への技術導入こそ今日の緊急事であると考えさせられました。既存技術の指導普及とは、平凡で新味を欠きしかも「今頃か」とのそしりも受けかねないでしょうが、実効を高め得る育種事業推進のためあえてその方向をとる考えを堅めたのであります。前にも述べた地域的機関紙発行の提案主旨は技術交流の中で全体のレベルアップを期待したものであることは容易に理解されますが、以上の様な実態認識の中から当分の間は管内の育種関係、特に現場担当者階層の技術的地ならしを試み、しかる後に前記提案の主旨に添いたいと考え、過般来奥羽支場とも協議を重ね、この様な企画をしたようなわけであります。

地域の特性に応じた実践的育種の実をあげるため、いくばくたりともお役に立てば幸いと存じます。今後広く皆様方の御指導と御協力を願って止みません。

本紙発刊に当り一応の経緯と主旨を申し述べごあいさついたします。(東北林木育種場長)

御 挨拶

三 宅 豊

輝かしい昭和42年の元月を迎えるにあたり、謹んでお祝のこたばを申し上げますとともに、皆様のご健康とご多幸を心からお祈り致します。

さて林木育種事業が全国的規模の下に組織的に着手されましたのは昭和32年でありまして、今年は満10周年にあたるのでありますが、当奥羽支場が昭和35年4月に林木育種場として、最後に創設されてからでも早や満7年になろうとしております。出来た当時の育種場はそれこそ何もなく、文字通り裸のままで生れて来た訳でございますが、最近ようやく林木育種場たる体裁をいくらかそなえてくるようになりましたのも上司や関係機関の適切なご指導やご援助並にご協力の賜と深く感謝申し上げます。

今回鈴木東北林木育種場長の提唱により、東北育種基本区の林木育種事業にたずさわっている現場の方々を対象にその相互協力と技術の向上をはかる目的で「東北の林木育種」を刊行されるにあたりまして、同じ仕事にたずさわる者としてその企画に対し、心から敬意を表する次第であります。もっともこのようなくわでは前村井場長の時代にも何度か話題にのぼりましたが、育種場開設後日も浅く、お互に多忙にまぎれて残念ながら実現を見なかったのでありますが、今回ようやくその運びになりましたことは誠にたえない次第であります。

林木育種の重要なことは今更言うまでもありませんがこれを推し進めることの困難なことは、この事業にたずさわって見て誰しも痛感するところであります。林木育種事業はただでさえ困難な事業であるうえに、東北地方と言う地域的气象的に不利な条件が加わって、一層われわれ現場の実行者を困らせているのであります。低温の害然り、雪害然り、生長が遅いとか、発根率が低いとか数えあげればきりが無いほどわれわれの前には困難な問題が山積しております。

林木には環境適応性の巾が非常に大きいものと非常に狭いものがあり、同一樹種でもそのような傾向が多分にあります。精英樹として選ばれたものの中には案外その巾の狭い方のものが多く選ばれているのではないかと思いますので、それを増殖したり、増殖したものを管理したりする場合に非常に困難性を伴うような気がします。とに角実際自分で手がけて見ないと分らないし、その時その場所と同じものを同じ方法であつかっていてもいろいろの結果が現われて、なかなか同じようにはいかないのでありますから、お互に自分の実行したそれらの経過なり結果なりを披歴しあって、一層適切な技術を身につけ、林木育種事業の推進に役立てね 頁3につづく

発 刊 を 祝 す

村 井 三 郎

待望の「東北の林木育種」の発刊が決まった。鈴木場長の英断に最大の敬意を表し、東北地方全般の林木育種に関心を持たれる方々と相共に慶賀にたえない処である

私が場長の役にあった当時、毎年の地区林木育種協議会で、地方の林木育種事業を実行している機関、すなわち青森、秋田、前橋営林局と東北地方の6県（福島県除き、新潟県入り）とが、東北林木育種場との連絡に年1～2回の会議だけでは満足出来ない、日進月歩する技術面や行政面の変化を周知させるためにもぜひ連絡紙が要望されると言う提案が、時々持ち出されていた。このことから本紙のようなものが、ぜひとも必要なのだと痛感していた次第である。処が現在迄のわが国における、林木育種に関する機関紙をみると全国的なものに、林木育種協会の「林木の育種」があって、年4回発行しており地方的なものとしては北海道に北海道林木育種協会があって、そこで「北海道の林木育種」を年2回発行している。この両機関誌の編集方針をみると、全国的な「林木の育種」では研究面を少くし育種情勢の推移と技術普及に力を注いでおり、一方地方的な「北海道の林木育種」では研究面を主体として連絡事項を含めたものとなっている、前者は階層を広くし、育種の初歩者迄を対象としており、後者は一人前の育種技術者を対象としたそれぞれ特徴を持つものと感じている。どちらの方針が良いか議論の分れる処であるが、公平な立場からみてまづ前者に類した技術普及に主力を注ぐ方針がこの地方には先決のものであろう。但し近い将来研究面を拡大し、完成された研究のみならず、中間段階の成果をも含ませるものとなれば、技術面の開発に寄与する処大なるものと信ずる。

かねてから地方で北海道だけが独自の協会を持っていることを羨しく思っていたが、それは北海道には国立の北海道林木育種場があるほかに、道立の光珠内林木育種場（現在は北海道林業試験場に昇格）王子製紙の栗山林木育種研究所、更に東京大学北海道演習林では林木育種に関する深遠なる研究を進めておられ、これら4者が集って協会を作っておられるので、連絡面は言うに及ばず技術研究面も相互の開発に相協力出来る立場を堅持しておられる訳である。東北地方ではそうは行かない。なんとかならないものかと長い間に亘って気をもんでいたが、最近に至って東北管内の各機関でも技術面の開発が急激に進展して、技術面の話題にも次第に深入り出来る情勢になって来たので、この時期に本紙の発刊を決めたことは誠に時機に適したものと感じられ、慶賀にたえない次第である。（前東北林木育種場長）

林木育種のねらい

渡辺 操

自然界にはいろいろの生物が、おのおのその所をえて巧みに、環境に順応しながら生活しております。われわれの祖先はこれらのうちから、人間の生活に有用なものを選び、これを栽培したり、飼育したりしてきました。

そしてこれらの栽培植物や飼育動物をさらに有用なものに変えようと努力を払ってきました。これがすなわち動植物の育種であります。林木育種も全く同じことで現在の林木よりも優れたものをつくり出して、これを正しく増殖していく仕事であります。

わが国の林木育種は民間林業地帯で、もう100年も前からスギのさし木品種をたくさんに選抜して、造林の目標に合致した品種を選んで植栽している地方も少なくありません。九州の日田や小国、関東の山武、近畿の北山などはその実例であります。

現在ある林木より優れたものという場合、如何なる点において優れておればよいのか、すなわち育種のねらいをどこにおくかによって、たくさんの異なった性質が考えられますが、そのときどきに応じて基準は変ることになります。ある場合には量産すなわち多収性が、ある場合には品質が、ある場合には病虫害に対する抵抗性が、またある場合には特殊立地に対する適応性が基準になって、それらの性質の上で優れたものがねらわれるのであります。欲をいえば終局の目標としては以上のすべての点において優れたものが要求されるわけでありませぬけれども実際には決して最初からそう三拍子も四拍子もそろった理想的なものが得られるわけでもありませんので、だんだん理想に近いものに改良していくという方法を採る以外にはありません。

現在国立の林木育種場を地域的に5つの本場と4つの支場とに分けて事業を進めております。なぜ育種場を設けて事業を進めているかと申しますと、気候的にもまた樹種の分布区域も一様でないからです。言いかえるならばより育種効果を高めるために、その気候や地域に応じてそれぞれの樹種についてより集約的に育種事業を進めるためであります。農業方面でも同じような考え方によって、それぞれの地域に育種を実行する場を設けております。

さて林木育種のねらいをどこにおくか、これは林木育種場が国の事業として発足した主な要因は、木材の不足

※ ばならぬと思うわけでありませぬ。

この「東北の林木育種」が遠からずその役割を果たすときがくることを期待し、かつ念じつつ発刊のご挨拶いたします。(東北林木育種場奥羽支場長)

からでありませぬから、量すなわち成長の早いものに重点がおかれるのは当然であります。

マツはパルプ用材として短伐期がねらいでしょうが、しかしセルローズの含量や繊維の長さなどの質的な点も考慮して育種を進めるべきでしょう。スギは日本全国に植栽されておりますが、育種の立場からみるとかならずしも同じ育種の方法で取扱いができない問題が含まれております。例えば東北は気候の関係でさし木が思うようにできないので、実生による方法もとらざるをえないし日本海側の一部でみられる豪雪地帯では耐雪性育種、また太平洋側の北上山系のような寒冷地帯では耐寒性育種といったように、多収性をねらうのはもちろんであるが、それと同時に特殊立地に適応する育種目標を立てて事業を進めるべきでしょう。カラマツは拡大造林の一環として広く植栽されているようですが、先枯病や落葉病などの被害がいたるところに発生をみており、カラマツの育種にあたっては耐病性を忘れて育種を進めることはできません。日本三大美林の一つであるヒバも、成長が遅いので時代の流れについてゆけずスギやその他の樹種に変えられてゆきつつあるようですが、ヒバの持つ材質の良さを失なわせないように、しかも成長の早いものを目標にヒバの育種も進めるべきでしょう。次に考えなければならない問題として広葉樹、なかんずくブナがあります。青森営林局の昭和40年度の調査によると、管内の総蓄積の68%が広葉樹で、しかもブナはその内36%も占めております。ブナは育種以前の問題として、天然更新や人工植栽の技術的な問題がまだのこされているとしても、ブナの跡地問題とからみあわせて、ブナの育種を考えてみる必要があるような気がします。

世代のくりかえしの短い農作物ですら農家の奨励品種として世にでるまでには数年かかるかと聞いております。まして永年作物である林木を相手にしての育種のような大事業で、その効果を50年、100年の後に期待しようとする場合、はっきりした育種目標を立てて根気よく粘り強く努力をつづけていくことが大切だと思います。

最近林木育種にも近代統計学などが応用されて、その成果を上げているようですが、育種場はまず実践育種に徹して、一日も早く良い「モノ」をつくり出すべきだと信じております。(東北林木育種場原種課長)

用語解説

クローン(英仏語、clone)：栄養系または分枝系ともいう。ある生物(主に植物)の1個体から栄養繁殖的(さし木やつぎ木など)に由来した子孫、有性生殖(タネ)を経ないので遺伝子の交換がなく、突然変異(枝変りなど)などの起らぬ限り全形質が常に等しく保たれるので、実験上にも、利用上にも都合がよい。

41年度林木育種協議会より

東北基本区林木育種協議会は、本年度で第8回を迎え昨年9月18、19日宮城県林木育種場で開催したが、林野庁はじめ青森、秋田、前橋3営林局と東北6県の関係々官等約80名が参加して行なわれた。当基本区のスギの育種は気候、地域等の環境条件が大きな因子となって、わが国全体のスギ育種計画に照らしおけている現状なので樹種をスギにしぼって討議が進められた。

A 提案事項の2、3について

- 1) 重要資料または調査試験についての結果はもちろん途中段階でも速報してもらいたい。

このことは以前からの要望もあり速報方式で発表できるものは本紙に掲載する。

- 2) 材質、各抵抗性品種の選抜を更に推進するとともにこの基準の設定。

材質については林業試験場で進められている。組織人員等の関係で目下のところは育種場ではできない。

カラマツ落葉病、先枯病抵抗性個体の検定林は43年度に設定する。スギ耐害性個体の選出、検定は奥羽支場ですすめている。

スギ耐寒性個体の選出および規準は年度内に案を作成するが、当面は本場内に定植された精英樹中寒害を受けなかったものを主体にすすめていく方針である。

B 事業的全般の質疑や現況等について

- 1) 育種計画ではスギのさし木(採穂園)と実生(採種園)の比率は基本区を通じて35:65に変更され、造成しやすい採種園が急速に進んでいるが、一応出来るものはドンドン進めておいて差支えないと思う。
- 2) スギさし木の発根については、機会あるごとに討議される問題であるが、今回は各種の資料から現段階で比較的容易に事業的規模で60%以上の発根率にランクできる精英樹クローンを示すと共に、今後同一クローンの台木のさし穂を各地域に配布して、さし木共同試験を実施する構想がまとまった。

- 3) スギ採種園ならびに採穂園の実行状況であるが、各機関の設定地毎に環境、育成方法等特に仕立て方、地表管理、施肥の実態等細部にわたり検討を加え、今後の育成管理に示さを与えた。

C 本協議会の本命である調査試験の発表討議は前にものべたとおり樹種をスギにしぼったためと、スギ採種園設定の日が浅いので研究調査等の資料に乏しかったが2、3の発表について述べる。

- 1) スギ採穂台木の仕立て方等の試験

本試験は東西両育種区の環境の異なる4カ所で、同一クローンで同一仕立てをしているもので、昭和36年設定5クローンをそれぞれ低刈、平刈、高刈、円筒形

自然形の5つのタイプに分けて、採穂量と発根率を調査しているが、37~41年の経過では平刈>低刈>円筒形>高刈>自然形の順の採穂量で、各タイプとも年々増加している。台木1本当りの最高は設定6年目で高刈式39本、最低は低刈式で26本となっている。発根率では円筒形86.1低刈84.3平刈82.3高刈67.7自然形64.7%となっているが、台木の樹形が完成に近づくに従い発根率順位が変わってくるだろう。また寒風害と仕立て方の関係は、自然形>円筒形>高刈>平刈>低刈の順に被害が多い。

- 2) 採穂園の肥培管理試験

これは施肥の種類と量が採穂量ならびに穂の大きさや含水率、そして発根にどのような影響を与えるかを調べている。設計等省略して現況をのべれば、処理別(施肥)と採穂量の関係は標準区、3N、 $-P_2O_5$ 区が多い。発根率では-N区が低い傾向にあるが、今のところ設定後3年の経過ではいずれの場合も有意差は認められないが、枝葉の色沢、硬軟に相違がではじめてきた。

- 3) スギ採種木の仕立て方試験

樹形を自然形、ラセン形、階層形、十字形に誘導するものであるが、いずれも樹高を5~6mで断幹し主枝の配置を変えて上記の形に誘導し、計画的にタネを採取する方法であるが、設定後日も浅いので、これについての強い討論はなされなかったが、スギに限らずアカマツ、カラマツについては樹高も4~5m位になっているので早急に仕立て方の方法を示さねばならないが、いずれも試験途上であり、もう少し時期をまつと共に、関係機関の共同試験、あるいは間伐木を利用して種々の仕立て方をやってみていただきたい。以上のような試験は岩手、秋田、新潟県からも発表討議がなされたが1年だけの結果でなく連年継続してもらいたい。

最後に被害防除関係については、昨年の協議会以来の経過では、各機関の採穂園、採種園共大きい被害は発生していないが、今後共各種の被害について十分対策を講じ、保護管理に重点をおくよう協議がなされた。

現地討議は宮城県林木育種場の見事に整備された採穂園採種園で林試の石崎室長、東北バルブの高山技術主任を囲み現物とにらみあわせて討論され、更に青森営林局古川営林署、中山苗畑に至り採穂園で刈込不足の感じを受けた大形の採穂台木を剪定整枝により改善する実習をもって、本年度の協議会を盛会裡に終了したが、東北の厳しい冬を越すためにも、抵抗の少ない低めの樹形がよさそうに感じられた。

なお明42年度の本協議会は舞台を山形県羽黒山に移し同県林木育種場で開催される予定である。(高橋直治)

技術解説

I 林木育種の進め方

林の中に入ってみると、同時に植えたマツやスギでもよく注意してみると、その形質や育つ早さなどが1本1本ちがっていることに気がつく。これはなぜだろう。まず考えられることは、環境条件のちがいによるものである。環境条件がちがえば当然のことながら、形や生長がちがってくる。同じ林分内でも、尾根と谷沿いではちがった品種を植栽したのではないかと思われるほどその形や生長がちがっている例をししばみかけるが、こういった環境条件のちがったところにも、うまく合致するような良い木を選んで育てることがまず第一である。それには適地の判定をあやまらずそれぞれの場所で十分にその性質を発揮するような品種をつくることである。それと同時に品種やクローンによって、植付本数をどの位にするか、枝打や間伐をどうしたらよいかというような点まで考えて、仕事を進めている。しかし以上のことがらだけでは、良い木はできない。林木育種を進める上でもっとも大切なことはその木が生れつき持っている遺伝的性質が良いか悪いかということである。どんなに造林技術が優秀であっても、生れつきの素質が良くならなければ十分な成果はえられない。この生れつきの素質の優秀なものを沢山ふやそうと一生懸命に努力しているのがわれわれの品種改良事業の仕事である。こういう林木の本来の性質を改良するには、どんな方法があるかを考えてみると、まず導入育種法がある。これはあくまでも品種改良本来の手段ではなく、ある地域で従来使っていた材料をもっと優秀なものにおきかえるために、ストローブマツやホプラのような外国樹種を植栽し、在来の樹種と比較してみる ことである。これが成功すれば大きな価値を生み出す可能性を持っており、現在当場があちこの営林署に設定して

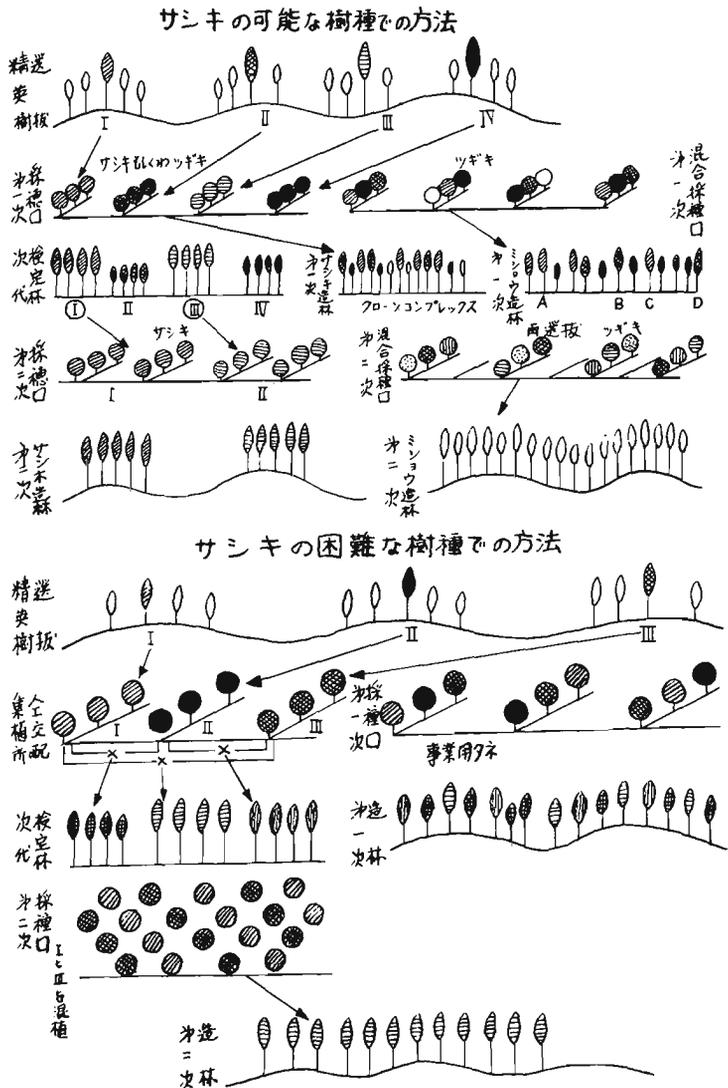
いる試植検定林がこれに当る。

次に選抜育種法がある。これは現在ある山林の中から優良な個体なり、林分なりを選び出し、これを正しく増殖する方法で、現在の育種計画の主な手段にされている。

三番目に考えられることに交雑育種法がある。品種や系統には優れた特性を持ったものが沢山あり、それぞれ一長一短がある。ある品種は成長が良いが病気に弱いか、反対に病気には強いが成長が悪いとか、そこでこれらを互に支配させて成長もよく病気にも強い品種をつくり出そうとする仕事で、動植物の育種方法として広く利用され大きな成果を上げている。

最後に創成育種法がある。これは従来全くなかった新品种をつくり出そうとする方法で、希望する特性が実在

精英樹選抜による林木品種改良事業図



していない場合に、人為的に創造しようとするもので、倍數体を利用する方法と、人為突然変異を利用する方法とがある。これらの方法については、後日説明したい。

以上で林木育種法の種類についての概要を述べたが、実際われわれが育種事業を進めるに当っては林野庁が作製した**林木育種事業指針**に基づいて仕事を実行しておりそれには暫定的な仕事と恒久的な仕事に分けて事業を進めるようになっている。暫定的措置としては、外国樹種の導入、在来品種の増殖（品種の特性、適応環境調査）採種林の取扱など、これらはあくまでも暫定的なもので、林木育種事業が本格的に軌道に乗ってその機能を發揮するまでの間である。育種事業本来の使命は恒久的措置である精英樹の選抜からはじまって、それから増殖されたクローンによって採種園や採穂園を造成して、これから良いさし木苗木や実生苗木をつくることである。この採種園や採穂園からた苗木はすべて満足すべき苗木のみだとはかぎらない。そこでこの子供達が本当に良いものであるかどうかをたしかめる必要がある。これをたしかめるため**次代検定林**を造成して検定にかけ、その中から再びよいものを選抜して更によりよいものをつくり出してゆくわけである。しかしこのように選抜を繰り返してゆくにも、その期待される効果には必ず限度がある。そこでわれわれは更に一步前進するために、こ

の選抜育種と併行して創成育種、つまり交雑や突然変異などの育種方法を用いて、よりよいものをつくらうとしている。

そこで育種場が実行している精英樹選抜による林木品種改良事業をよく理解していただくために、その仕事の内容をわかりやすく図式化したのが前頁の図である。その図をみることによって、林木育種の進め方をまわりくどい文章で読むよりもよくわかることと思う。

以上でだいたいの林木育種事業のしくみがわかったことと思うが、回を追って林木育種の実際についてこの技術解説を次のような順序で試みたいと思う。

I 選抜育種	II 導入育種
1 精英樹とその選抜法	1 樹種の導入
2 精英樹選抜の現況	2 試植検定林
3 増殖	III 交雑育種
イ) さし木	IV 創成育種
ロ) つぎ木、とり木	V 抵抗性育種
4 採穂園	1 耐寒性育種
5 採種園	2 耐雪性育種
6 主要林木の開花結実 特性	3 耐病虫性育種
7 主要林木の着花促進	VI 採種林の造成
8 次代検定	VII 優良遺伝子群の保 存 (渡辺様)

編集後記

「東北の林木育種」という題名で月刊の機関紙を発行することになった。題名について一部から内容に似合わず堅すぎはしまいかとか、先輩格であり学究的専門誌として名声高い「林木の育種」や「北海道の林木育種」に似ているのでおこがましいのではないかとのももでているが、将来の抱負もあるのでこれに決定した。

編集内容は最初から高いものを望んではいない。営林署に例をとれば、とりあえず苗畑主任、作業班長を対象とし、漸次課長等計画、指導を担当する階層へとスポットをうつしていきたくて考えている。したがって当初は平易な技術解説や各場所の紹介等からはじめられるが、回を追って逐次程度を高め、各自の研究発表や相互の技術交流等と移行させたい。これらの点は管内の現地視察や最近実施した現場担当員に対する研修の体験から出た実感でもある。いつれにしても當場管内に対する「林業新知識」の小型育種刊として、地域の問題と実践的育種の方向を保っていききたい。

この種のねらいは印刷物だけでは果すことができないので、今後関係機関の理解ある協力を得てなるべく実地研修や意見交換の機会実現をはかりつつ全体の向上を期したいものである。

思いつきで生れた職場の機関紙は生命力が弱いものとの実例から、発行の間隔や頁数等について親切なご忠言もいただいているが、その点は今後皆さんの好意ある協力にすぎり、依頼または自由投稿を求めるなどして皆さんの手で本紙を育てていただくようお願いしたい。特に本紙に対する自由投稿や質問、ご意見等は大きいに歓迎するところである。

林野庁でも林木育種10周年記念のうわさもあるが本紙は當場の記念事業の一環とうけとってもらってもよい。

本号は6頁となっているが、次号以降は4頁だてとし当分の間は半分を技術解説に、残りの半分を他の問題にふりむけていきたい。記事の内容や編集要領も上等でないが場員が業務のかたわら精力的に作りあげたものであるからその点を了として御愛読願いたい。

今回特別お願いして前場長村井氏や奥羽支場長から本紙に対するごあいさつや御助言をいただいたので、特記して感謝する。(編集委員)

昭和42年1月1日発行

編集 東北林木育種場
岩手県岩手郡滝沢村滝沢
TEL 滝沢駅前 17
印刷所 杜陵印刷